

gckanbun Package Documentation (Reworked)

Original ver. : Munehiro Yamamoto

Modified ver. : Kosei Kawaguchi a.k.a. KKT_εX

Version 2.6.0 (2026/06/21)

目次

1	概要	3
2	変更点	3
3	設置・依存性	3
3.1	読み込み	3
3.2	オプション	3
4	各種コマンド	4
4.1	概観	4
4.2	追記：LuaTeX-jā v20260107.0 に伴って	4
4.3	コマンド間の空白について	5
4.4	使用方法	5
4.4.1	<code>\kaeriten</code> 、 <code>\返り</code>	5
4.4.2	<code>\furigana</code> 、 <code>\振り</code> 、 <code>\okurigana</code> 、 <code>\送り</code>	5
4.4.3	<code>\<prefix>groupruby</code> 、 <code>\グ振り</code>	6
5	局所縦書き	7
6	通常の漢文	9
7	漢詩	10
7.1	基本の打ち方	10
7.2	エンジンによる注意	12
8	GCKEnv	12
9	Version History	15

1 概要

このリワークは、gckanbun パッケージを、日本における漢文組版においてより高い品質を担保できるように改変したものです。オリジナルの作者様である山本宗宏 (Munehiro Yamamoto) さんとの協議により、メンテナーを形式上私川口晃世 (KKTeX) が引き継ぐこととなりました。

gckanbun パッケージはそのルビや返り点の制御構造において非常に優れていたため、大枠はオリジナルのそれを踏襲し、必要最低限の拡張及び変更にとどめています。また、本パッケージに関する山本さんの記事として、

<https://qiita.com/munepi/items/5e6ac49fa5c025123305>

もぜひご参照ください。

2 変更点

私は本パッケージを作成するにあたり、既存の gckanbun パッケージを以下を満たすように改変しました。

- ① 再読文字に対応するコマンドの提供。
- ② 横書き環境でも正しく動くようにする。
- ③ 一レ点などの特別な返り点に対処するためのコマンドを提供する。
- ④ 行間に対してルビの「大きさ」が反映されるように変更。(それに伴い、オリジナルで生じていた文字サイズ変更に伴うルビと本文の被りが生じる問題を解消。)
- ⑤ 筆者の作成した (TeX Live にも収録されている) luwa-ul パッケージと併用し易い仕様にする。

3 設置・依存性

3.1 読み込み

適切な場所に gckanbun.sty のファイルを設置し、`\usepackage{gckanbun}` とかけば読み込みは完了です。

本パッケージは LuaLaTeX でも (u)pLaTeX でも使用が可能です。

ただし、推奨は LuaLaTeX+jlreq です。LuaLaTeX 以外で扱う場合、内部で使用している `\ltjghostbeforejachar` と `\ltjghostafterjachar` の恩恵を受けることができず、bxghost パッケージを用いた和文ゴーストの挿入に切り替わります。その際に出力が劣化し得るため、LuaLaTeX が望ましいのです。

3.2 オプション

パッケージオプションは `prefix=<prefix>` (デフォルト値: gckanbun) となっていて、gckanbun パッケージが提供する 4 つのコマンド `\gckanbunruby`、`\gckanbungroupruby`、`\gckanbunokurigana`、

`\gckanbunkaeriten` をそれぞれ `<prefix>ruby`、`<prefix>groupruby`、`<prefix>okurigana`、`<prefix>kaeriten` として提供します。このオプションにより、他のパッケージで提供されるルビ振りコマンド `\ruby` との衝突を避けられます。

以下の説明においては、`prefix` を空白として指定したものと仮定してコマンド名を表記しています。必要に応じて補って読んでください。

4 各種コマンド

4.1 概観

漢文組版において必要十分であるコマンドは、

- 返り点
- 振り仮名 (モノルビ)
- グループルビ
- 送り仮名
- 再読振り仮名
- 再読送り仮名
- 一レ点、上レ点、甲レ点、天レ点
- ハイフン

です。これらに対し、本パッケージでは、それぞれ

- `\<prefix>kaeriten`、`\返り`
- `\<prefix>ruby`、`\振り`
- `\<prefix>groupruby`、`\グ振り`
- `\<prefix>okurigana`、`\送り`
- `\<prefix>ruby`、`\振りのオプション引数`
- `\<prefix>okurigana`、`\送りのオプション引数`
- `\IchiRe`、`\JyouRe`、`\KouRe`、`\TenRe`
- `\KanHyphen`

が対応しています。

このうち、`prefix` が適用されるのは `\<prefix>kaeriten`、`\<prefix>ruby`、`\<prefix>groupruby`、`\<prefix>okurigana` のみであることに注意が必要です。

4.2 追記：LuaTeX-jā v20260107.0 に伴って

`gckanbun` パッケージは、v2.2.7 以降より、`\振り`、`\送り`、`\返り`などの各種コマンドの後に、適切な `kanjiskip` が挿入されるような設計を導入しました。ただし、この設計の重要な要素である `\ltjghostbeforejchar` と `\ltjghostafterjchar` の仕組みは、LuaTeX-jā における v20260107.0 より前のバージョンを使用する場合機能しません。したがって、本パッケージを v2.2.7 以降のものに

アップデートする場合には、LuaTeX-jā も同時に v20260107.0 以後のものにアップデートされている必要があります。

4.3 コマンド間の空白について

`\振り`・`\グ振り`・`\送り`・`\返り`は、直後に続くコマンドや文字を`\futurelet` で先読みし、送り仮名や返り点・句読点が続く場合に字送りを調整します。v2.6.0 以降では、この先読みが協調するコマンドの間に挟まった空白・改行・コメントを無視するようになりました。そのため、

`\グ振り{読}{よ}\返り{し}書` と `\グ振り{読}{よ} \返り{し}書`

は同一の組版結果になります。ソースを読みやすく改行・字下げしても、余分な和文グルーが入ったり調整が外れたりしません。

4.4 使用方法

4.4.1 `\kaeriten`、`\返り`

これらの2種類のコマンドは全く同一のコマンドです。

Input
1 雖\返り{\IchiRe}鬼
2
3 雖\返り{\JyouRe}鬼
4
5 雖\返り{\KouRe}鬼
6
7 雖\返り{\TenRe}鬼

Output	横書き
雖 _レ 鬼	
雖 _ト 鬼	
雖 _リ 鬼	
雖 _ミ 鬼	

のような出力になります。

4.4.2 `\furigana`、`\振り`、`\okurigana`、`\送り`

`\furigana`、`\振り`は同一、`\okurigana`、`\送り`は同一です。

Input

```

1 \振り{雖}{いへど}\送り{モ}\
2 \振り{所}{ゆ}\返り[intrusion=post]{二}\振り{\KanHyphen}{彖}\振り{以}{ん}\
3 \振り{猶}{な}[ごと]\送り{ホ}[キラ]

```

Output 横書き

いへども
雖

ゆ 彖 ん
所 以

なほ
猶
ごとキラ

v2.1.0 以前では、各コマンドにはスターオプションがありましたが、現在では別の仕様に変更されました¹⁾。

「所以」のように訓読用ハイフンを含む語をモノルビで組む場合は、`\返り [intrusion=post]{二}`のように返り点へ `intrusion=post` を指定します。v2.4.1 以降では、通常の縦組と局所縦組のどちらでも、`\KanHyphen` を親文字とするルビ外箱の前後に余分な和文グルーが入りません。

4.4.3 `\<prefix>groupruby`、`\グ振り`

`\<prefix>groupruby` と `\グ振り` は同一のコマンドで、複数の親文字を一つの親文字列として扱うグループルビを配置します。デフォルトの `prefix` では `\gckanbunggroupruby` となります。書式は

`\グ振り [intrusion=pre|post|both]{親文字列}{ルビ文字列}[再読ルビ文字列]`

です。親文字列とルビ文字列はそれぞれ不可分な一群となり、途中では改行されません。親文字列が長い場合は、LuaTeX-jā の標準グループルビと同じく、ルビ前・ルビ文字間・ルビ後の空きを 1:2:1 の比率で配分します。ルビ文字列が長い場合は自然幅で中央配置します。

第 4 引数（オプション）には、モノルビ（`\振り`）の第 4 引数と同様に、再読文字用の再読ルビを指定できます。再読ルビは親文字列の下段（縦組では左側）に、上段ルビと同じ 1:2:1 の比率で伸縮配置されます。直後に `\送り{送り仮名}[再読送り仮名]` を続けると、送り仮名は上段ルビの末尾に、再読送り仮名は再読ルビの末尾に、それぞれモノルビと同じ高さで並びます。箱幅は `max(親文字列, 上段ルビ, 再読ルビ)` で決まり、いずれの段もはみ出しません。

Input

```

1 \グ振り{所以}{ゆえん}\送り{ノミ}
2
3 \グ振り{所\返り[intrusion=post]{一}\KanHyphen 以}{ゆえん}\送り{ノミ}
4

```

1) 以前は、スターオプションをつけると振り仮名や送り仮名の部分が行間計算に影響を与えなくなるという仕様を設けていましたが、使用されることがほぼないため削除しました。

```

5 \グ振り[intrusion=both]{不可思议}{ふかしぎ}
6
7 \グ振り{所以}{ゆえん}{かくか}\送り{ナリ}[シム]

```

Output

横書き

```

ゆえんノミ
所以
ゆえんノミ
所一以
ふかしぎ
不可思议
ゆえんナリ
所以
かくかシム

```

親文字列には\返りや\KanHyphenなどの訓点コマンドを含められます。親文字列内で更新された内部状態はグループルビの外へ持ち越されません。なお、親文字列に\KanHyphenを含む場合は、ハイフンで連結した語を不可分な一群として扱うため、親文字列全体をベタ組（kanjiskip=0）で組みます。\\KanHyphenを別名マクロやグループで包んだ場合も同じ処理になります。\\KanHyphenを含まない親文字列では、通常どおりkanjiskipによる字間が入ります。

親文字列内で\返り[intrusion=post]{...}\\KanHyphenと直接続けた場合、返り点の占有幅だけを完全に相殺します。ハイフン本体の一文字分の幅は維持されるため、返り点とハイフンの間に余計な空白を作らず、ハイフンが直前の親文字へ重なることもありません。

親文字列中の\\KanHyphenは、別名マクロや波括弧を何段か経由しても検出され、同じベタ組処理が適用されます。ただし、親文字列内へさらに\振りや\グ振りを入れ子にすると上下のルビが競合するため、この用法はサポートしません。

\グ振り{天地}{てんち}\返り{レ}文のように直後へ返り点を置く場合、返り点は通常の\返りと同じ幅を確保してグループ末尾の親文字の後へ配置されます。ルビや再読ルビが親文字列より長い場合も、ルビ外箱の右端ではなく末尾親文字の直後へ位置を戻します。そのため、前の親文字や続く本文文字とは重なりません。

\グ振り{天地}{てんち}[]のように再読ルビへ空のオプション引数を明示した場合は、再読ルビを省略した場合と同じ行高・ベースラインになります。

intrusionにはモノルビと同じくpre、post、bothを指定できます。ルビが親文字列より長い場合に限り、指定した側の突出量を前後の字送りから差し引きます。無指定の場合はルビ全体の自然幅を確保します。

5 局所縦書き

このパッケージによって提供されるコマンドは局所的な縦書きにも対応しています（v2.2.0以降限定ですので、それ以前のものと出力が壊れることに注意してください。）。

v2.3.0以降では、各コマンドは呼び出し時に文書の組方向を動的に検出します。そのため、縦組み

環境に切り替えたタイミングで自動的に縦書き補正が適用されます。

手動で制御する場合は以下のコマンドを使用します。

`\GCKTateOn` 縦書き補正を強制的にオン（手動モード）。

`\GCKTateOff` 横書き補正を強制的にオン（手動モード）。

`\GCKTateAuto` 手動モードを解除し、自動検出に戻す（v2.3.0 新規）。

局所縦書きを開始する際には、`\GCKTateOn` を入れます。もし、通常が縦書き環境の中で局所横書きをする場合には `\GCKTateOff` となります。`\GCKTateAuto` を実行することで、その後の方向検出が再び自動になります。

Input

```
1 \parbox<t>{8\zw}{\GCKTateOn%
2 \振り{雖}{いへど}\送り{モ}\
3 \振り{所}{ゆ}\返り[intrusion=post]{二}\振り{\KanHyphen}{桑}\振り{以}{ん}\
4 \振り{猶}{な}[こと]\送り{ホ}[キラ]
5 \par}
6
7 \parbox<t>{8\zw}{\GCKTateOn%
8 今夫\送り{レ}江戸\振り{者}{は}、世之所\送り{ノ}\返り{レ}称\送り{スル}名都\振り{大}
9 {だい}\振り{邑}{いふ}、%
10 冠蓋之所\返り{レ}集\送り{マル}\LineNumbering*{\kakko{2}}\dashKK{舟車之\振り{所}
11 {と}ころ)\送り{ニシテ}\返り{レ}\振り{湊}{あつ}\送り[intrusion=post]{マル}、%
12 実\送り{二}\振り{為}{た}\送り{ル}\返り{二}天下之大都会\返り{一}也。%
13 而\送り{レドモ}\LineNumbering{C}\nolinebreak\underLineKKAuto{其地之為名、訪之於
14 古、未之聞}。%
15 豈\送り{二}非\送り{ズ}\返り{三}古今相\送り{ヒ}去\送り{ルコト}\振り{日}{ひび}\送り
16 {二}遠\送り{ク}、%
17 事之相\送り{ヒ}変\送り{ズルコト}愈多\送り{ク}、%
18 求\送り{ムルモ}\返り{二}其\送り{ノ}所\送り{ヲ}\返り{\IchiRe}欲\送り{スル}\返り{レ}
19 聞\送り{カント}而不\送り{ルコト}可\送り{カラ}\返り{レ}得、%
20 亦\送り{タ}\振り{猶}{な}[こと]\送り{ホ}[キラ]\返り{二}今之於\送り{ケルガ}\返り{\JyouRe}古\送り{二}也。
21 \par%
```


Output

局所縦書き

いへんと雖あ所ゆ猶な
こと以ん

いへんと今夫江戸者、世
いへんと之所、称名都
いへんと大邑、冠蓋之
いへんと所集、舟車之
いへんと所、湊、実為
いへんと天下之大都会
いへんと也。而、其地之
いへんと為名、訪之於古
いへんと未之聞。豈非
いへんと古今相去、日
いへんと遠、事之相變
いへんと愈多、求其
いへんと欲聞、而不可
いへんと得、亦猶今之
いへんと於古也。

6 通常の漢文

通常の漢文を打つ際には、

- ルビはモノルビ仕様
- 必ず\振り→\送り→\返りの順番にコマンドを配置

の2点に注意します。

縦書き環境における出力は以下ようになります。漢詩でなければ、通常の文章と同様の打ち方で問題ありません。

漢文に傍線を引く場合、luwa-ul パッケージが最適です。自動でルビを検出²⁾し、下線を適切に持ち上げてくれます。詳しい仕様は、luwa-ul のマニュアルをご参照ください。

Input

```

1 \documentclass[luatex,fontsize=8pt,paper=b5,tate]{jlrq}
2 \usepackage{luwa-ul,KKsymbols}
3 \usepackage{gckanbun}
4
5 \begin{document}
6
7 今夫\送り{れ}江戸\振り{者}{は}、世之所\送り{ノ}\返り{れ}称\送り{スル}名都\振り{大
}\だい\振り{邑}{いふ}、冠蓋之所\返り{れ}集\送り{マル}\LineNumbering*{\kakko
{2}}\dashKKAuto{舟車之\振り{所}{ところ}\送り{ニシテ}\返り{れ}\振り{湊}{あつ}\送
り[intrusion=post]{マル}}、実\送り{ニ}\振り{為}{た}\送り{ル}\返り{ニ}天下之大都
会\返り{一}也。

```

2) luwa-ul パッケージの提供する“Auto Series”の機能を使用することで可能となります。

```

8 而\送り{レドモ}\LineNumbering{C}\nolinebreak\underline{KKAuto}{其地之為名、訪之於
   古、未之聞}。
9 豈\送り{ニ}非\送り{ズ}\返り{三}古今相\送り{ヒ}去\送り{ルコト}\振り{日}{ひび}\送り
   {ニ}遠\送り{ク}、事之相\送り{ヒ}變\送り{ズルコト}愈多\送り{ク}、求\送り{ムルモ}\
   返り{ニ}其\送り{ノ}所\送り{ヲ}\返り{\IchiRe}欲\送り{スル}\返り{レ}聞\送り{カント}
   而不\送り{ルコト}可\送り{カラ}\返り{レ}得、亦\送り{タ}\振り{猶}{な}[ごと]\送り{ホ
   }[キヲ]\返り{ニ}今之於\送り{ケルガ}\返り{\JyouRe}古\送り{ニ}也。
10
11 \end{document}

```

Output

縦書き

今夫江戸者、世之所稱名
 都大邑、冠蓋之所集
 舟車之所湊、実為天下
 之大都會也。而其地
 之為名、訪之於古、未之聞。
 豈非古今相去日遠、
 事之相變、愈多、求其
 所欲聞、而不可得、
 亦猶今之於古也。

また、通常の文章の中にいきなり「ゴタルハナホ過ルガ猶バ不バ及」と漢文を打ち込むことも可能です。和文 TeX 一般に見られる `\ruby` と類似の挙動をとるため、組版を壊さずに出力することが可能です。

7 漢詩

7.1 基本の打ち方

漢詩を打つ場合には、`\makebox` と `intrusion` オプションを使います。`intrusion` オプションを指定すると、ルビ文字が親文字の幅を超えた時に前後の領域に「侵入」する形で配置されます。

しかし、漢文はほとんどの文字に何らかのルビが振られるため、普段から侵入を許可する仕様にするとかえって読みづらいです。したがって、本当に必要な時にだけこのオプションを使うべきです。

漢詩において、各句の最初と最後の字が水平方向に揃っていないと見栄えを損なってしまいます。そこで、`gckanbun` パッケージでは `\GCKanshiBox` と `intrusion` オプションを用意しています。

`\振り` `intrusion=pre/post/both` の 3 種類

`\送り` `intrusion=post/both` の 2 種類

`\返り` `intrusion=post/both` の 2 種類

v2.6.0 以降、上記以外の値を `intrusion` に指定すると（例：`intrusion=typo`）、黙って無視せずパッ

ページエラーを送出します。値の打ち間違いに気がやすくなっています。
が各コマンドで提供されるオプションであることに注意し、

```
Input
1 % 構文
2 \GCKanshiBox{< 1 句の長さ>}{<句>}
3
4 % 使用例
5 \GCKanshiBox{10\zw}{%
6   \振り[intrusion=both]{春}{しゅん}%
7   \振り[intrusion=both]{眠}{みん}%
8   不\返り[intrusion=both]{レ}%
9   \振り{覚}{おぼ}\送り{エ}\返り[intrusion=both]{レ}%
10  \振り{曉}{あかつき}\送り[intrusion=post]{ヲ}%
11 }
12
13 \GCKanshiBox{10\zw}{%
14   \振り[intrusion=both]{処}{しよ}%
15   \振り[intrusion=both]{処}{しよ}%
16   聞\送り{ク}\返り[intrusion=both]{二}%
17   \underline{KKAuto}{\振り[intrusion=both]{啼}{てい}%
18   鳥\送り{ヲ}\返り[intrusion=post]{一}}%
19 }
20
21 \GCKanshiBox{10\zw}{%
22   \振り[intrusion=both]{夜}{や}%
23   \振り[intrusion=both]{来}{らい}%
24   風%
25   雨\送り[intrusion=both]{ノ}%
26   声%
27 }
28
29 \GCKanshiBox{10\zw}{%
30   花%
31   \振り{落}{お}\送り[intrusion=both]{ツルコト}%
32   知\送り[intrusion=both]{ル}%
33   \振り[intrusion=both]{多}{た}%
34   \振り[intrusion=both]{少}{しょう}%

```

Output

縦書き (漢詩)

花 夜や 処し 春しゅん
 落お 来らい 処し 眠みん
 知ん 風 聞ニク 不
 多た 雨、 啼でい 覚おぼえ
 少し 声 鳥一ツ 暁あかつき

内部実装としては、

Input

```
1 \makebox[<幅>][s]{<引数>}
```

をベースにしており、挿入される `kanjiskip` に反応して等幅に伸縮するという仕組みとなっています。

7.2 エンジンによる注意

この漢詩用のインターフェースは基本的には LuaLaTeX 推奨 となっています。uplatex でも動くものの、`\GCKanshiBox` の引数が適切に伸縮しない場合がある³⁾ので注意が必要です。

もし、何らかのの原因で適切に漢字の間にアキが入らない場合には、手動で`\hfill`を入力して対処することになります。

8 GCKEnv

v2.2.7 以降、`GCKEnv` という環境が新規追加されました。この環境は、本パッケージを用いて漢文を、完全に統一された行間、より広い字間のもとに組版するために設けられたものです。

構文は

Input

```
1 \begin{GCKEnv}{<baselineskip>}{<kanjiskip>}
2   <内容>
3 \end{GCKEnv}
```

となります。

3) utarticle クラスとは相性が良いが、uplatex と jlreq の併用は相性が良くない。

<baselineskip> 行間をどの程度にするか指定します。

<kanjiskip> 字間をどの程度にするか指定します。

以上が各引数の説明ですが、具体例を見ていただく方が早いでしょう。

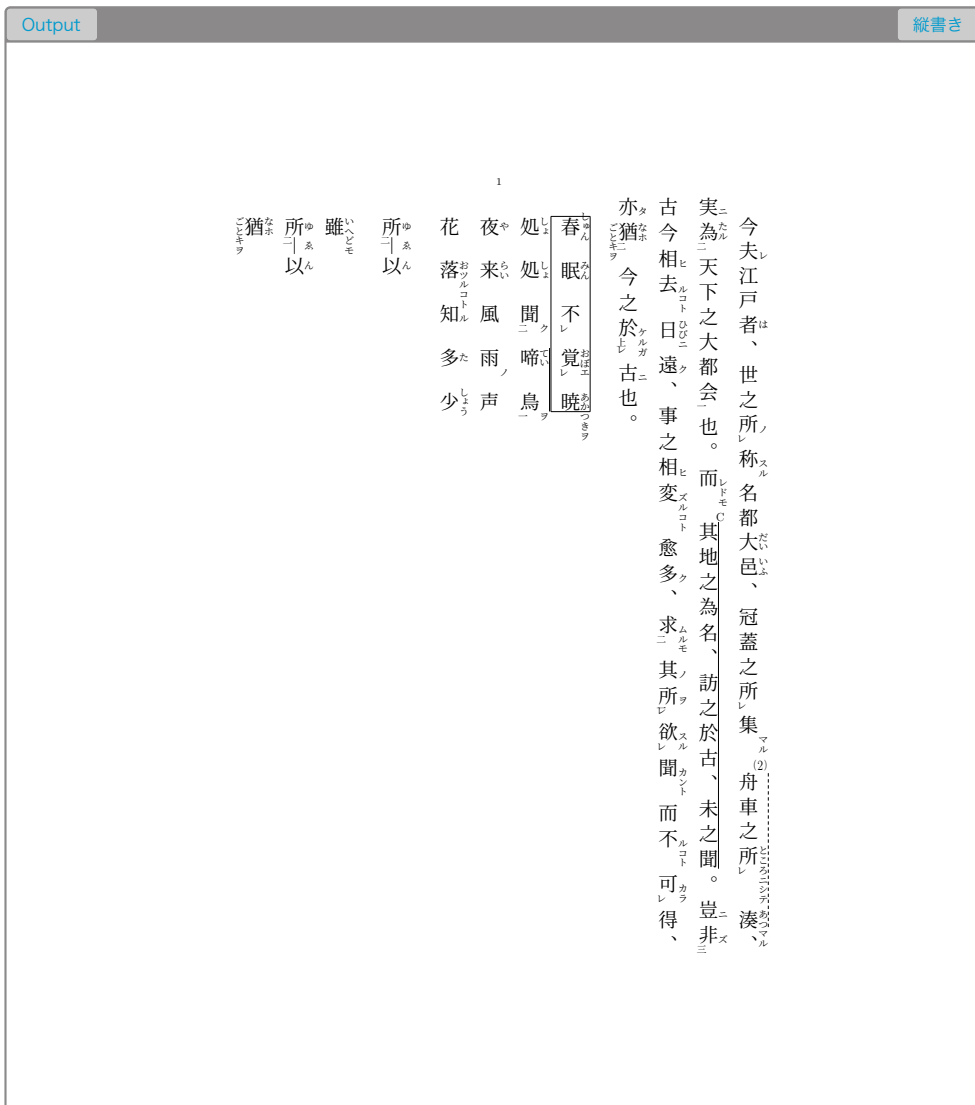
Input

```
1 \LARGE
2 \begin{GCKEnv}{2\zw}[.5\zw plus .15\zw minus .15\zw]
3 今夫\送り{レ}江戸\振り{者}{は}、世之所\送り{ノ}\送り{レ}称\送り{スル}名都\振り{
4 大}{だい}\振り{邑}{いふ}、冠蓋之所\送り{レ}集\送り{マル}\LineNumbering*{\kakko
5 {2}}\dashKKAUTO{舟車之\振り{所}{ところ}\送り{ニシテ}\送り{レ}\振り{湊}{あつ}\
6 \送り[intrusion=post]{マル}}、実\送り{ニ}\振り{為}{た}\送り{ル}\送り{ニ}天下之
7 大都会\送り{一}也。
8 而\送り{レドモ}\LineNumbering{C}\underLineKKAUTO{其地之為名、訪之於古、未之聞
9 }。
10 豈\送り{ニ}非\送り{ズ}\送り{三}古今相\送り{ヒ}去\送り{ルコト}\振り{日}{ひび}\送
11 り{ニ}遠\送り{ク}、事之相\送り{ヒ}変\送り{ズルコト}愈多\送り{ク}、求\送り{ムル
12 モ}\送り{ニ}其\送り{ノ}所\送り{ヲ}\送り{\IchiRe}欲\送り{スル}\送り{レ}聞\送り{
13 カント}而不\送り{ルコト}可\送り{カラ}\送り{レ}得、亦\送り{タ}\振り{猶}{な}[こと
14 ]\送り{ホ}[キヲ]\送り{ニ}今之於\送り{ケルガ}\送り{\JyouRe}古\送り{ニ}也。
15 \end{GCKEnv}
16
17 \bigskip
18
19 \begin{GCKEnv}{3\zw}
20 \fbox{\GCKanshiBox{10\zw}{%
21 \振り[intrusion=both]{春}{しゅん}%
22 \振り[intrusion=both]{眠}{みん}%
23 不\送り[intrusion=both]{レ}%
24 \振り{覺}{おぼ}\送り{エ}\送り[intrusion=both]{レ}%
25 \振り{曉}{あかつき}\送り[intrusion=post]{ヲ}%
26 }}
27
28 \GCKanshiBox{10\zw}{%
29 \振り[intrusion=both]{処}{しよ}%
30 \振り[intrusion=both]{処}{しよ}%
31 聞\送り{ク}\送り[intrusion=both]{ニ}%
32 \underLineKKAUTO{\振り[intrusion=both]{啼}{てい}%
33 鳥\送り{ヲ}\送り[intrusion=post]{一}}%
```

```

25 }
26
27 \GCKanshiBox{10\zw}{%
28   \振り[intrusion=both]{夜}{や}%
29   \振り[intrusion=both]{来}{らい}%
30   風%
31   雨\送り[intrusion=both]{ノ}%
32   声%
33 }
34
35 \GCKanshiBox{10\zw}{%
36   花%
37   \振り{落}{お}\送り[intrusion=both]{ツルコト}%
38   知\送り[intrusion=both]{ル}%
39   \振り[intrusion=both]{多}{た}%
40   \振り[intrusion=both]{少}{しょう}%
41 }
42 \end{GCKEnv}

```



9 Version History

- v2.0.0 (2025/11/04) — Initial public release as a reworked version.
- v2.1.0 (2025/11/12) — Modified package documentation. Also, KKT_EX added some options for KANSHI typesetting.
- v2.2.0 (2025/12/26) — Fixed a problem in which a previous `\送り` has an effect on the next `\`

返り [`\intrusion=post`]{`arg`}. Also, make every commands can be used in partly-vertical-mode with the new `\GCKTateOn`.

- **v2.2.7 (2026/01/05)** — Added `GCKEnv` in order to typeset in more sophisticated way. Also, adjusted `kanjiskip` to be applied in the same manner as standard Japanese characters. This update also optimizes the layout logic for Chinese poetry (`Kanshi`), eliminating the need for manual `\hfill` commands.
- **v2.3.0 (2026/06/12)** — Each command now auto-detects writing direction at invocation time, enabling correct behavior in partial-vertical contexts without explicit `\GCKTateOn`. Added `\GCKTateAuto` to resume auto-detection after manual override. Internal code cleanup and bug fixes.
- **v2.3.2 (2026/06/13)** — Suppress `\KanHyphen` surrounding `kanjiskip` via `\inhibitglue`. Replace `\llap` with `\makebox[Opt][r]` in special return-mark commands for clarity.
- **v2.4.0 (2026/06/13)** — Migrated internal implementation to `expl3`: variable declarations (`\dim_new:N`, `\bool_new:N`), option processing (`l3keys2e`), arithmetic (`\dim_compare:nNnTF`), named scratch boxes, and load-time engine branching (`\sys_if_engine luatex:TF`). Fixed `\AtBeginDocument` ignoring the manual `tdir` flag. The `\futurelet` lookahead mechanism is retained.
- **v2.4.1 (2026/06/19)** — Suppressed Japanese glue around a ruby whose parent is `\KanHyphen` at the outer ruby-box level, preserving `\intrusion=post` in full and partial vertical writing.
- **v2.5.0 (2026/06/19)** — Added group ruby command `\gckanbungroupruby` (`\グ 振り`). Ruby shorter than its base uses LuaTeX-j compatible 1:2:1 spacing; longer ruby supports `\intrusion=pre`, `post`, and `both`. Parent text may contain Kanbun annotation commands.
- **v2.5.1 (2026/06/20)** — Added re-read ruby support to group ruby and aligned its three-row structure with `monoruby`. Fixed spacing when a return mark with `\intrusion=post` is followed directly by `\KanHyphen` inside the parent string: only the return-mark width is cancelled, keeping the hyphen width without an extra gap.
- **v2.5.2 (2026/06/20)** — Made group-ruby hyphen detection robust through alias macros and nested braces by propagating the `zero-kanjiskip` request to the parent box. A return mark following group ruby now preserves its natural width and is aligned after the final parent character, avoiding overlap on either side even when ruby is wider than its base. Explicitly empty reread ruby now preserves the same baseline as an omitted reread argument. Added horizontal, vertical, and upLaTeX edge-case regression matrices.
- **v2.5.3 (2026/06/21)** — Prepared the corrected group-ruby and return-mark implementation for CTAN release. Added complete CTAN release metadata, included all horizontal, vertical, and upLaTeX regression files in the distribution archive, and made the documentation build depend explicitly on its embedded test PDF.
- **v2.6.0 (2026/06/21)** — Made command chaining whitespace-insensitive: a space, line break, or comment between cooperating commands (e.g. `\振り/\グ 振り` followed by `\送り` or `\返り`) no longer breaks the `\futurelet` lookahead nor inserts spurious glue, so spaced and

adjacent input now produce identical layout. Invalid `intrusion` values are now rejected: `\振り` accepts `pre/post/both` and `\送り/\返り` accept `post/both`; any other value raises a package error instead of being silently ignored. Added a whitespace regression matrix (`gckanbun-edge-test-whitespace.tex`) and a LuaLaTeX-only `make check` release gate, and dropped the unused caption dependency from the documentation build.